

## 緒 『視点』という著作の本質について

齊藤 彰範

「私の著作活動の中で、そうすることが許され、そうする衝動を私を感じ、それゆえ今や私がそれを私の義務とみなすようなそういう一時点に到達した。つまり、まさしく事実であるところのもの、私が著作家として自分でそうであるとみなしているところのものを、ただ一度だけ、可能な限り率直に、隠し立てなく、きつぱりと、説明するということである。」<sup>(1)</sup>

これは、S・キエルケゴール著『私の著作活動への視点 (Synspunktet for min Forfatter Virksomhed)』（以下、単に『視点』）の冒頭の部分である。ここに明らかなようにこの書はキエルケゴール自身が自分の著作活動の真相を、「ただ一度だけ、可能なかぎり率直に、隠し立てなく、きつぱりと」述べたもの

なのである。さらに彼は、『視点』は「あたかも宗教書を読むかのごとき思慮深さをもって読まれるべき書物である」とさえ言っている<sup>(2)</sup>。

以上が、キエルケゴール自身が『視点』に与えた根本性格である。従って、

①『視点』そのものの内容を正確に把握し、②その成果を彼の著作活動全体へと正確に適用するならば、当然それは彼の著作活動全般に関する正当な解釈たりうるはずである。

従来のキエルケゴール研究は、そのほとんどが『視点』ではなく、『哲学的断片後書』を解釈の拠り所にしてきたという経緯がある。しかも、解釈者自身がそれを明確に意識しているかいないかに関わりなくそうなのである。確かに、キエルケゴールは『視点』だけではなく『後書』においてもまた自分の著作活動全般に関するかなり詳細な解説と構造分

析を行つてはいる。しかし、『後書』には先に『視点』に見たような根本性格は与えられてはおらず、それどころかその内容はあくまでJ・クリマクスという架空の人物によるものであつて、自分の見解では決してないことをキエルケゴール自身自ら宣言してはばからない<sup>(3)</sup>。なるほど、J・クリマクスはすべての偽名著者を統轄する位置にある。それは確かにそうなのだが、それぞれの偽名著者たち、あるいは個々の偽名の著作を「彼」の立場から説明しきつてしまふならば、あえて言うなら「J・クリマクスの偏向」とでも言うべき事態に陥りかねない。それはどういふことかという点、彼が『後書』において主張する徹底した「主体性重視」の立場が、何ら質的区別なしに、すべての偽名著作にそのまま無差別に適用されかねない、といふことなのである。その場合、われわれの「主体性」に必然的に付随する宗教的なものに対する「錯覚」、あるいは「錯覚的宗教性」とでも呼ばれるべきものに対して反省を向けることがおろそかにされ、その結果さらに、感性的——審美的に誤解された非本来的——非キリスト教的共感性が解釈の中心に据えられてしまふ。

こうした事情を踏まえて、本研究においてはあ

えて(いわば、一種の実験的試みとして)『後書』を無視し、ひたすら『視点』によってのみ著作活動全体の解釈を進めることとした。その結果どうなるかについては、今のところはもちろん何とも言えない。が、少なくとも本研究における方法が、キエルケゴール自身の意図にまったくかたがたないわけではないことだけは確かなのである。

## I 感性的——審美的実存の実質について

キエルケゴールは、著作活動の全期間を通じて、自分がいわゆる審美的著作家から宗教的著作家へと「精神的」に深化し、発展していったのではないことを強調する。そうではなくて、「自分は最初から宗教的著作家」なのであつて、いわゆる審美的著作は一種の「Mystification」なのだ、といふのである。この言葉については、「欺く、迷わせる、煙に巻く、言いくるめる、わざと戸惑わせる」等々、いろいろな訳語を適用することができようが、「真に受けさせる」、あるいは「真に受けさせて人を欺く」とでも訳すべき言葉である。Mystification はそれ自体としては、一種の虚偽、あるいは欺瞞に他ならない

が、しかしキエルケゴールによれば、ある人に対して何かを正確に、且つ真摯に伝えようとする場合、しかも、その相手がこちらが伝えようとする事柄に関して何らかの「誤解」あるいは「先入観」に捕われている場合に、その相手がそういった「誤解」あるいは「先入観」に捕われていることをその相手自身に「自覚」させることを通じて、それらを除去してやらねばならない。そのための具体的な手段が *Mystification* なのだ、というのである<sup>(4)</sup>。従って、著作活動そのものに即して言うなら、「宗教性」に関する何らかの「誤解」あるいは「先入観」を除去する、という働きをする限りににおいて、*Mystification* は「目的論的眞実性」を有する、ということになる。要するに、*Mystification* を用いざるを得ないような宗教性に対する「誤解」がキエルケゴールの同時代において「蔓延」していたからこそ、彼は方法としてこれを用いたのである。

では、*Mystification* を用いざるを得ないような宗教性に関する誤解とは具体的にはいかなるものか。さらに、著作活動全体がキエルケゴールが言うように *Mystification* であるなら、より具体的にどこで

どのように彼は読者を迷わせ、煙に巻き、戸惑わせ、眞に受けさせ、欺いたのか。

本研究は今述べた最初の課題の解決のための、いわば序論的考察である。

キエルケゴールはあくまで彼の「同時代のコペンハーゲンの人々」に対して語りかけ、「彼ら」を覚醒させようとしたのである。その限りでわれわれは何よりもまず、キエルケゴール自身が彼の生きた時代そのもの、もしくはその時代の精神的諸状況をどのように理解し把握していたか、ということについての考察から始めなければならないだろう。

「眞剣さと、それとともに物を見る目をいくらかでも持つている人が、いわゆるキリスト教界 (*Christeden*) とよばれているものを、もしくはいわゆるキリスト教国家における状況を観察するならば、疑いなく誰でも直ちに、極めて疑わしく思うに違いない。そもそも、こうした何千何百という人々すべてが自分を直ちにキリスト者と呼ぶということ

は、一体全体何を意味しているのか。このとてつもなく多くの人間たち、そのとんでもなく圧倒的な大多数は、およそ人間が判定し得る一切に従って言うならば、自分の人生を（キリスト教などというものとは）全く別の範疇の中で生きていたのであって、このことについては、最も単純な観察によつてさえ納得しうるのだ！おそらくかつて一度たりとも教会へ行ったことのない人々、一度たりとも神について考えたことのない人々、悪態をつく (bande) 時以外は決して神の名を呼んだことのない人々！自分の人生が神に対するなんらかの義務を負うているはずだ、などということが決して頭に思い浮かんだことのないような人々、市民的な意味で無罪であることを最高のこととみなしてそれに固執するか、あるいはそれさえも全く必要なこととは思わないような人々、しかしこうした連中がみな、それぞれどこか神などというものは存在しないんだ、と主張するような連中でさえもみな、すべてキリスト者であり、自分をキリスト者と呼び、国家によつてキリスト者と承認され、教会によつてキリスト者として葬られ、キリスト者として永遠へと送り出される！

ここに巨大な混乱、恐るべき錯覚が隠されている

に違いないということ、このことについてはまったくもつて何の疑いもありえない。」<sup>(5)</sup>

この「キリスト教界」という「巨大な錯覚」こそがキェルケゴールの全著作活動の出発点である。そして、言うまでもなく彼は、この「錯覚」から人々を引き離すことを通じて、彼らを覚醒させようとしたのである。では、この「巨大な錯覚」とはいかなる錯覚であつたのか。この「錯覚」の本質は何か。

①「キリスト教界」という錯覚の本質は「キリスト教的なもの」の内へ「感性的—審美的なもの (Dæsthetiske) を混入させてしまつてゐることにあるということ

先程の引用からも全く明らかなのだが、この「錯覚」が感性的—審美的 (æsthetisk) な方向性を持っているということについては何の疑いもあり得ない。しかし、単にそれだけならば、「キリスト教界」というものを何も「錯覚」扱いする必要はないと言える。それがあえてわざわざ巨大な「錯覚」であることとみなされることの根拠は、そこでは人々が「宗教性」とは全く別の範疇、あるいはそれとは全く無関

係な、要するに単に *aesthetic* であるにすぎない範疇の中で生きているのにもかかわらず、自分たちを「キリスト者」と思い込み、あるいは、そう妄想していることにこそある、とキエルケゴールは考えるのである。つまり、この「巨大な錯覚」とは、「キリスト教界」において、実際には「審美的なもの、あるいはせいぜいのところ審美的—倫理的なものうちで生きているにすぎない」<sup>(6)</sup> 人々が、「キリスト教的なもの」と「審美的なもの」とを「ごっちゃにし、相互に浸透させ、結局「キリスト教的なもの」を混乱に陥れている、ということに他ならないのである。キエルケゴールははつきり次のように言う。

「確かにまた人は審美的なものがキリスト教的なものであるという妄想のなかで生きているのである。なぜなら、彼は自分がキリスト者であると思いついて、実際に審美的規定の内に生きているからである」<sup>(7)</sup>

### ②この「錯覚」の普遍性

「巨大な錯覚」の本質が「キリスト教的なもの」と、「審美的なもの」とをいわばとつ違えて、「ご

ちゃにしていることにあるということとは以上から明らかであると言える。さて、ここで注意すべきことは、この錯覚に陥っているのが、たとえば、感性的—エロスの天才性の具現であるドン—ジュアンとか、あるいは『誘惑者の日記』におけるヨハンネスとかいった、言うなれば「特殊な個人」だけでは決してない、ということである。つまりキエルケゴールの考えでは、キリスト教界においては「ほとんどすべての人々」がこの「巨大な錯覚」に陥ってしまったっており、その意味で「誰も」がこの「巨大な錯覚」の担い手たり得るのである。

「キリスト教界は巨大な錯覚であり、多くの者たちが自分たちをキリスト者と呼ぶのは妄想である、と想定してみよう。その場合に、われわれが今ここで言及している錯覚が極めて一般的である公算は非常に大きい。しかし、この錯覚はまさしく、人はキリスト者である、という妄想によってさらに悪くされる。」<sup>(8)</sup>

③「キリスト教界」における大衆 (Menge) の自己安住性について

先程も述べたように、キエルケゴールはキリスト教界における「大衆」がすべて、極端に墮落した、許されざる背徳の真只中で生活している、などと主張しているわけでは決してない。無論、そうしたいわゆるデモニーニッシュな人物が「キリスト教界」内部に多数存在するということも確かではあるが、キエルケゴールが著作活動において主として対象としているのは、こういう特殊な「天才」的個人なのではない。そうではなくて、彼が扱っているのは、彼の言い方に従うなら、Mængdeにおける「悪ではないにせよ、その凡庸さ」<sup>(9)</sup>に外ならない。つまり、Mængdeはその凡庸さゆえに、かの「巨大な錯覚」の真只中にいっぱい完全に浸りきってしまった、安心して (tryk < sicher >)、安らぐで (berolige sig < sich beruhigen >) いられる、<sup>(10)</sup> というのである。キエルケゴールはこのことについて、自分自身の「実存」と Mængde のそれとを比較しつつ、次のように述べている。

「わたしが『あれか—これか』でもって始めたとき、潜在的には、私が一般にそうであったのと全く同じように、極めて深く宗教的に影響されていた。

私は、極めて深く震撼させられていたので、大部分の人が自分の生活をその中に持っているところの、安穩無事な中庸さを見いだすことが私にとって是不可能であることを根本から理解していた。」<sup>(11)</sup>

キエルケゴールは、日常生活の平穩無事の中に安らぎを見いだし、それを神に感謝するような生活態度、一般にはキリスト教的に「敬虔」なものとして承認され称賛さえされているこうした生活態度を決してキリスト教的—宗教的なものとはみなさない。というのは、そのような「敬虔さ」の中にすら、きわめてしばしば「*aesthetisk*なもの」の無意識的な混入を見て取ることができるからである。キエルケゴールにとって「はむしろ、そうした「敬虔さ」からとにかく「もとへ戻る」ことこそが肝要なのである<sup>(11)</sup>。

④宗教的なものに関わるのは年をとってからで十分である、とする錯覚

さて、Mængde が「巨大な錯覚」の中にあつて「審美的なもの」の内に自己安住しているという

が真実であるならば、翻って、かれらがそこから外へ出て行くこと、あるいはそこから引っぱり出されること、をひどく嫌悪するであろうこともまた確実である。その結果、かの「巨大な錯覚」は次のようなことを言い始めさせする、つまり、「宗教やキリスト教は人がかなり年を取って初めてそれへと逃げ込むところの何物かである」というのである。

「審美的なものとは常に、青春とそれが持つあの永遠性の瞬間とを高く評価し過ぎて、年齢というもののもつ真摯さとは、ましてやいわんや永遠性の真摯さとは和解することはできない。審美的なものはそれゆえ、宗教的な人間に対して常に疑念を持っている、その疑念によれば、宗教的な人間は審美的なものに対するセンスを欠いているか、あるいは彼は根本的には何とかして審美的なものに属したままでい続けたいと切望しているのだが、しかし、時間がその減衰力を發揮して、彼は歳を取り、それゆえ宗教的なものへと逃げ込んだのだ、というのである。さらに、人間の生涯は二つの時期に分かれるのだという、すなわち、青春時代は審美的なものの時代であり、老年期は宗教性の時代である……しかし、率

直に言うなら、われわれの誰もが、実際は若いままであり続けたかったのだ、と。」<sup>(12)</sup>

というわけで、審美的な人間は次のように結論する。

「それゆえ、もし人が常に若いままであり続けられるならば、人はキリスト教も宗教性も全く必要とほしないうであらう。」<sup>(13)</sup>

以上述べた、言うなれば「審美的なものの自画自賛」、並びに、その立場からのひたすら独善的な宗教観、に対するキェルケゴールの評価は次の如くである。

「これは、あらゆる真の宗教性にとって極端に有害な誤謬である。それは、その根拠を時間的な意味において歳をとることと、永遠性という意味において歳をとることを混同することのうちに持っている。」<sup>(14)</sup>

⑤ 正規のキリスト教会は「キリスト教界」における「錯覚」をかえって助長してさえいるということ。

「キリスト教界」という「錯覚」の内実については、『視点』第二部第一章で述べられている限りにおいては、とりあえず以上の如くであると言える。しかしキエルケゴールはさらに、正規の「デンマークキリスト教会」の牧師たちは、彼ら自身が実は「巨大な錯覚」の内にあつて、その「錯覚」を助長することに加担してきえるのだ、と主張する。

「私は内心、キリスト教界において正規にキリスト教を宣教する人々に対して繰り返し繰り返し次のような非難を行つてきた。それは、彼らが自らきわめて多くの錯覚に取り巻かれてそこに安住しつつ、人々を喚起させる勇氣を持たない、ということである。それはすなわち、彼らが彼ら自身のなすべき責務 (Sag=Sache) との関連において十分に自己自身を否定していない、ということなのである。彼らは好んで信奉者を獲得しようとする、しかし、彼らがそうしようと思うのは、それが彼らの責務を強固なものにするからであり、そして、まさにそれゆえに彼らは、その信奉者たちが真実に信奉者となるか否かということについて徹底的に正確に調査をする、ということをしてしない。このことはまた、彼らがより

深い意味においてなすべきいかなる責務をも持つてはいない、ということの意味する、すなわち彼らは、彼らの持つている責務に対して利己的に関係しているのである。それゆえに彼らは実際、人々の間へと出て行くことを敢てすることはないし、また、純粋な理念の印象を与えるために諸々の錯覚を敢て放棄するというようなこともしない、何故なら、彼らは人々に注意を喚起することが真に危険なことであるという考えを、おぼろげながら持つているからである。」<sup>(15)</sup>

キエルケゴールによれば、Mangde が日々の生活の中で感性的—審美的なものにひたすら没頭していられるのは、そういうものに対して「教会」が許可、あるいは承認を与え、それどころかそれを賞賛しさえするからだ、というのである。ここにわれわれは、後の「教会闘争」におけるキエルケゴールの主張に一脈通ずるものを見て取ることができる。と同時に、少なくとも、彼にとつてのキリスト教とは Mangde 化した教会的キリスト教とは全く異質な「何か」であることも見て取れるのである<sup>(16)</sup>。



以上がキェルケゴールが言う「キリスト教界」という「錯覚」の実態である。それが「宗教的なもの」を取り込んだ単なる「感性的—審美的なもの」にすぎないということはとりあえずは明らかであると言える。

さて、話がここですべて終わってしまうかというところ、とまったくそうではない。以上述べたことはいわば、「キリスト教界＝錯覚」の底辺」＝「Mangde」についての議論に過ぎないのである。キェルケゴールは『視点』においてこうしたものをばかりを扱っているわけではない。むしろ重要なのはこのあとの議論、すなわち、「キリスト教界」という錯覚の内部にあつて最も高められ、最も洗練され、最も「聖化」さえされたところの、いわば「頂点に立つ錯覚」＝「Digter」についての議論なのである。

## Ⅱ 『視点』第二部第三章の問題

——キェルケゴールにおける

「詩人」概念について

この第三章には「私の著作活動における摂理の役

割」という表題が与えられている。つまり、この章は、キェルケゴール自身が、自分の著作活動においていわゆる神の「摂理」というものがどれ程重要な役割を果たしているか、あるいは、自分は自分の著作活動においてどれ程多くのことを神の摂理に負っているか、を述べたものである……と、一応言える。

さて、この『視点』第二部第三章は過去のキェルケゴール研究においてあまり重視されてきたとはいえない、あるいは少なくとも、言及されることはあつてもその内容、本質を深く突っ込んで究明されることはなかった、と思われる。その理由はいくつか挙げられようが、一つには、この第三章は、内容、文体、そのどちらについても「宗教的」色彩が極めて濃い、ということである。要するに、その表題だけを見ても明らかのように、ここには「キリスト教的—宗教的」な言説が満ち満ちており、この章全体が一種の信仰告白のような趣を呈している。その結果「そういうもの」として解釈されかたづけられてしまった可能性は少なからずあると言えるのである。

二つ目としては、『視点』そのものの構造がこの

第二部第三章を軽視させる「かの」ごとくになってしまっているということである(事實はいささかもそうではないのだが)。つまり、『視点』という書物を通読した場合に、その要点は「第二部第一章」であつて、この部分においてこの書の論旨は言い尽されている、よつて「第三章」は「摂理」への感謝の言葉であり、神への頌歌である……かの様に確かに見えなくもない、ということである(くどいようだが事實は全くそうではない)。もし仮にキエルケゴールがここでいわゆる「神の摂理への感謝の言葉」を単に書き連ねただけにすぎないならば、たとえそれがどれほど美しい文章であつたとしても、いちいち言及するには及ばない、一種の「審美的・宗教的」な美辞麗句にすぎない、と断言してよいだろう。そういうものに対しては何よりもアイロニーこそが最適の処方箋なのだ、と他ならぬキエルケゴール自身が言うであろう。しかし、この「第三章」には、そうした言明は皆無であると断言できる。本来、彼の宗教思想は「そういうもの」とは無縁である。そうではなくてキエルケゴールはここで、自分は全著作活動(あるいは全生涯と言つてもよい)を通じて究極的に「何」と戦い、あるいは

「何」と戦わざるを得なかつたのか、ということについて述べているのである。つまり、少々先走つて述べるなら、この第三章で扱われているのは、「キリスト教界」錯覚の頂点に位置するところの、最高段階にまで高められた「錯覚」、それを粉碎することこそが「キリスト者となる (live Christen)」ことへの何よりも第一歩でもあるところの、極限にまで高められた「錯覚」、以外ではないのである。

そうだとすればこの「第三章」がキエルケゴールの全著作活動を統轄すらし得るほどの重大な意義を有しているという可能性はかなり大であると言えよう。この見解が妥当であることは、以下の考察に示される通りである。

この「第二部第三章」がキエルケゴールの著作活動全体の構造解明ということに対して有する意義を明らかにするためには、彼の著作活動において「摂理」というものが「具体的」にどのような役割を果たしてきたのか、ということを考察してみなければならぬ。

そこで、まずは「第三章」全体の基本的な構成を把握しておく必要があるろう。

第①パラグラフ P 1 1 9 L 1 7 — P 1 2 4 L 2 6  
第②パラグラフ P 1 2 4 L 2 7 — P 1 2 6 L 3 0  
第③パラグラフ P 1 2 6 L 3 1 — P 1 3 1 L 1 3  
第④パラグラフ P 1 3 1 L 1 4 — P 1 3 7 L 1 1  
第⑤パラグラフ P 1 3 7 L 1 2 — P 1 3 7 L 1 6

これは原典がそうなっているからであって、そうである以上はさしあたっては誰もこれに異論をさしはさむことはできない。以下、理解をより容易にするためにこのキェルケゴール自身による段落構成に従う形で考察を進めるわけだが、このうち特に重要なのは第①パラグラフ及び第②パラグラフである。

第①パラグラフは言うなれば「第三章」全体の序論である。この箇所の要点は、「自分の著作活動は神に対する一種の「義務作業」(Pfligtarbeit = Pflichtarbeit)」に外ならなのだ」ということである。

「あの天才的な突進、あるいは天才における騒々しい中断、といったものほど私の態度に似つかわし

くないものはない。要するに私は、根本においては神の事務所における書記係のように生きてきたのである。そもその初めから、私はまるで身柄を拘束されているかのようなようであつたし、また主人の役を演ずるのは私ではなく、主人であるところのある他者が存在するということを私はあらゆる瞬間に感じ取っていた、さらに、その者が自分の全能と私の無力とを私に気づかせる時には、私はそれを恐れとおのきをもつて感じ取っていたし、また、私が彼に、そして(彼に対する)絶対的恭順をもつて(自分の)仕事(Arbeit)に関わる時には、私はそれを筆舌に尽くしがたい浄福をもつて感じ取っていたのである。」<sup>(17)</sup>

ここでまず目を引くのは、「天才(Genie)」という概念である。これは「Pfligtarbeit」概念に対立するものだと言ってよい。Genie は自分の内部から沸き上がって来る爆発的な創作意欲、あるいは自分の燃え立つような内的衝動(それがどれほど美的に洗練されているようにまいが、さして問題ではない)に従って行動する。それゆえ、「天才は反省(Reflexion)を持たない」とキェルケゴールは言う(これがキェルケゴールによる天才論の核心でもあ

る。cf. SVI, 8, 125; また、キエルケゴールに特有の「反省」概念については後述)。つまり、キエルケゴールの考えでは *Genie* とはまったく直接的―無反省的、その限りでまったく *aesthetisk* な生の範疇に属する規定なのである。……しかるに、自分の著作活動には、そのような「天才」的要素は絶無であり、また自分は断じて「天才」ののではない、そうではなくて自分は一字一句几帳面に、しかも神に対して恭順 (*Lydigbed*) の意を表しつつ、自分の引き受けた仕事を着実にこつこつと仕上げていったにすぎない、そうキエルケゴールは言うのである。これが、キエルケゴールの言う「*Pilgerbetide*」ということの意味であり、また、これこそがキエルケゴール自身の神への関係のあり方に外ならない。言うなれば、それは燃え立つような情熱と感激に満ちたものではなく、「反省」によるそれ、なのである。

さて、この第一パラグラフにおいてキエルケゴールは今述べた「自分の場合」とはまったく異質な神との関係のあり方を想定している。それは、自らの信仰、あるいは神―関係を「表現 (*Udtryk*)」するということへの途方もない「情熱」を内に秘めたこと

ろの、従ってキエルケゴールのそれとは全く異質な、ある特殊な、にもかかわらずより「一般的」でさえあるような、そういう神―関係、なのである。

「というのは、私が神の助力を必要としたこと、そしていかに私が常々、来る日も来る日も、来る年も来る年も、神の助けを必要としてきたのか、ということ……こうしたことを思い出し、それを正確に提示しうるためには、私は記憶や追憶を助けにする必要はないし、あるいは日誌や日記などというものはもちろん、それらを相互に比較参照する必要もない。というのは、私はいままさにこの瞬間においても再び、きわめて生き生きと、そしてありありと、それを追体験しつつあるからである。とは言え、もし大胆さと感激、ほとんど狂気と見まごうばかりの陶酔が問題であるなら、このペンが描写できないものなどあるだろうか！　そして今や私は私の神に対する関係について語らねばならない。すなわち私は、神が私のためにしてくださった筆舌に尽くしがたいこと、それは私がかつて期待していたよりもはるかに無限に多くのことなのだが、そのことに対して感謝を捧げる私の祈りのなかで日々繰り返されているところのものについて語らねばならない。

そして、驚かされるといふことを、神について、神の愛について、そして人間の無力が神の助けによって為し得ることについて驚かされるといふことを私に教えた体験について語らねばならない。そして、永遠を渴望することと共に、永遠が退屈なものであることを見いだすことを恐れないことを私に教えたものについて語らねばならない、というのは、感謝すること以外の他のいかなることを為さないうために私が必要とした状況はまさしく永遠なのだからである。さて、私が今これらのことについて語らねばならないちようどその時に、私の魂の中に詩人の焦燥が目覚める。私は、「馬のために私の王国をくれてやる」と叫んだかの王よりもっと断固として、しかも、その王がそうではなかったように至福に満ちつつ断固として、私は、思想にとつて恋するものが恋人を見い出すよりもっと至福であるもの、すなわち、「表現 (Udtrykkel)」を見い出し、そしてこの表現を私の唇の上に湛えつつ死ぬために、一切を、私の命さえをも与えるつもりだ。そして、提示される事態を見よ、思想は童話の庭のあの果実のようには魅惑的で、豊かで、暖かく、心のこもったものであり、表現は、私の内面にある感謝の衝動にとつ

て和らぎをもたらし、熱い憧れを鎮めてくれるのだ……それはあたかも、もし私が翼のはえたペンを持っていたとしても、いや、それを十も持っていたとしても、提示される豊かさに対応して、十分に素早くそれに追従することが不可能なほどなのである。しかし、私が自分のペンを手に取るや否や、私は、足を動かすことができないということについて人が語るがごとくに、一瞬私はそれを動かすことができないのだ。この様な状態ではかの関係についてはただの一行も紙上に記すことはできないのだ。私にとつてはまるで、私にたいして次のように語った声を聞いたように思われるのである。愚かな人間よ、彼は何を血迷っているのか、彼は、恭順こそが神にとつては牡羊の脂よりも好ましいものであることを知らないのか。すべてを義務作業 (Pligtarbejde) として為せ、と。そうして、私はまったく落ち着いて、一つ一つの文字を私のゆっくりとしたペンでほとんど周到といつても良いやり方で書く時間が生ずるのだ。そして、かの詩人情熱が私の中に再び目覚めると、その時には、私にとつてはあたかも、教師が子供に対して、さあペンをしっかりと握って一字一字正確に書くんですよ、と言うときの

ような、そういう声が私に語りかけるのを聞いたような気がするのだ。そうして私はそれを為すことができる、そして私はその他のことをあえてやろうとはしない、そして、わたしは一語一語、一行一行を、その次の語、その次の行のことをまったく知らないかのようにして書くのである。そして私が後になつてそれを通読するなら、それは私をまったく違つた形で満足させる、というのは、たとえ一つや二つの灼熱する表現が私から洩れ出していたとしても、作品はまったく別物であり、詩人—情熱の、あるいは思想家—情熱のそれではなく、敬神のそれだからであり、わたしにとつてはそれは神への崇敬だからなのである。」<sup>(18)</sup>

ここは『視点』全体の中でも最も難解な個所だといつて差しつかえない。というのは、ここでキエルケゴールは彼のいわゆる「偽名の諸著作」での論理の展開様式をいわばそのまま凝縮したかのような書き方をしているからである。

キエルケゴールによれば、自分が自分の神との関係について語ろうとするや否や、その神についての「思想 (Tanken=Gedanke)」を「表現 (Udtryk)」し

ようとする衝動が、その Udtryk を唇の上に湛えて死ぬためには自分の生命さえをも犠牲にしてやまないところのあの衝動が、すなわち「詩人の焦燥 (Diger-Uaalmødighed)」が目覚めるのだ、というのである。そして、重要なのはこの次なのだが、それに続けて即座に、かつ端的に彼は、「この様な状態、すなわち「詩人」—「焦燥」、あるいは「詩人」—「情熱」の状態においては神との関係についてはただの一行も書き記すことはできないのだ」と言い切っている……つまりキエルケゴールはここで、Digerによつて「表現」される「神—人—関係」と、キリスト教本来の「神—人—関係」とはそもそも質的にまったく別物なのだ、ということを主張しているのである。それは、「詩人的情熱」と「キリスト教的情熱」との絶対的な質的差異（見かけ上はどれほど似ていようと）<sup>(19)</sup>、と言い換えてもよい。……だからこそまた、次のようにも言われる。

「しかし、今この瞬間にまさに体験していること、あるいはまさに体験したこと（註。先程の註<sup>(18)</sup>の引用箇所を参照）は、きわめて頻繁に全著作活動のもつて経験されたのである。『詩人』について、彼は

思想 (Tankeme) を得るために詩神に呼び掛ける、ということが言われる。こうしたことは本来決して私の場合ではなかった。私の個性それを理解することさえ拒む、むしろ逆に私は思想の豊富さに対して私自身を守るために日々神の助けを必要としたのである。実際、一人の人間にこのような作品産出能力と、そしてこれほどまでに弱った健康状態とを付与してみたまえ、きつと彼は祈ることを学ぶに違いない。私はいついかなる瞬間においても次に述べるような芸当をやつてのけることができたし、今でもそうすることが出来る。つまり、私は座つたままで、全く間をおくことなく昼夜、そしてまたその次の昼夜にわたつて続けざまに書き続けることができる、なぜなら、私には有り余る豊富さがあるからである。だがそんなことをしたら、私は破滅していたことであろう。」<sup>(20)</sup>

要するにキエルケゴールは、「詩人」的能力そのものならば、自分は絶対的に卓越しており、他の誰にも劣ることはない、だからこそかえつて逆に、自分の中にあるそうした詩人性から自分自身を守るために、自分は絶え間なく「神の助け」を必要としたのだ、と主張するのである。彼が言う「摂理の役

割」とはまさしくこういうことなのである。

さて、そうだとすればこの『視点』第二部第三章において説かれているところの、キエルケゴール独特の「詩人」概念が彼の著述全体に対して及ぼす意義は、極めて重要であると言わねばならないだろう。つまり、通常ヨーロッパ語として「詩人」、「作家」、「著作家」といった程度の意味を表すにすぎないこの *Dichter* 概念が、キエルケゴールにおいては彼独自の独特なニュアンスを持つて使用されていると見なされ得るのである。というのは、キエルケゴールはここでいわば、自分が「詩人」で「なくなる」ために「摂理の助け」を絶え間なく必要としたのだ、と「告白」しているに等しいからである。

以上述べたことは次の(Ⅱ第②)パラグラフにおいてさらに論理的かつ正確に述べられる。

「もし私が全著作活動における摂理のこうした役割を可能な限り明確に表現せねばならないとすれば、私を教育したのが摂理であり、そしてその教育は作品制作の過程に反映されているという言い方以上にさらに特徴的でさらに決定的な表現を私は決して知らない。その限りで、先程詳述せられたこと、即ちすべての審美的著作は一種の欺瞞であるという

ことは、ある意味では完全に正しいということにはならない。なぜなら、この表現は意識という点においていささかあまりに多くを認めすぎているからである。しかし、これは全く真実でないというわけではない。なぜなら、私は自分が教育のもとにあることを、しかもそのことを最初から最後まで意識していたからである。その教育の過程とは、詩的な、あるいは哲学的な本性がキリスト者となるためには取り除かれる、ということである。」<sup>(21)</sup>

ここで特に注意すべきは以下の三点である。

①自分は全著作活動を通じて「摂理」によって教育されてきた、ということ。

②その教育の具体的内容は自分の詩人的、および哲学的本性が除去されることにあつた、ということ。  
③そして、その教育の過程は、自分の著作活動そのものへと反映されているのだ、ということ。

これらは、キエルケゴール自身による「著作活動」についての極めて正確な性格づけであると見える。要するに、自分は「摂理」によって「詩人的なもの」、および「哲学的なもの」を放棄するよう教育されてきた、しかも自分の著作活動そのものがそのことを切実に反映しているのだ、と言うのである。

る。さらに詳しく次のようにも言われる。

「この視点からこそ、現代に対する著作活動の意義が最もよく示される、と私は思う。もし私が現代に対する私の判断を一言で言わねばならないとするなら、次のように言いたい、すなわち、現代は宗教的な教育が欠けている、と。キリスト者となり、キリスト者であるということは一種のささいなことになるってしまった、そして、審美的ものがあからさまに優位を占めている。人はキリスト者であること(すべての人がもう既にそうだというのだ)よりもさらに先へ進むことによつて、キリスト教的なものを混入することでもつて洗練されたところの、審美的且つ知的な異教へと帰り着き、あるいはその中へと入つてゆくのである。そういうわけで、キリスト教界における大部分の者に対して設定されねばならない課題は、「詩人」から、あるいは詩人が語るところのものに関係することから、詩人が語るところのものの中で生活することから、思弁から、すなわち、(実存するかわりに)思弁すること、の内に空想的に自分の生を生きる(そんなことはまた同時に全く不可能なことだ)ということから脱して、キリスト者になるということである。第一の運



動は、著作活動全体の中では審美的作品全体が意味するところのものであり、第二の運動は『結びとしての後書』が意味するものである。それは、後書に固有の問題、すなわち、キリスト者となる、という問題を明らかにするために、審美的作品の全体を自分によって、自らに引き入れ、あるいは編集することによって、自らは全く同じ運動を別の領域(Sphere)で行う。すなわち、思弁、体系等々から離れて、キリスト者となることへと向かうのである。<sup>(22)</sup>

ここでキェルケゴールが言っている「キリスト教的なもの」を混入することをもって洗練されたところの、審美的且つ知的な異教」とはすなわち、「審美的なもの」と「キリスト教的なもの」を混乱させてしまった「キリスト教界」そのものを指すと言えよう。そして、その「キリスト教界」を成立せしめているものうち、いわばその頂点に立つものが「詩人」と「思弁」なのだ、とそうキェルケゴールは言うのである。そうである以上、「キリスト教界」に対する課題は、

- ① 「詩人」から脱してキリスト者へ、
- ② 「思弁」から脱してキリスト者へ、

の二つであることになる。そして、第一の課題を担うのが「審美的著作」であり、第二の課題を担うのが「哲学的断片後書」、ということになる。

以上の考察は次に示すように総括することができる。

1 「あれか—これか」から「人生航路の諸段階」に到るいわゆる「審美的著作」は本質的に「詩人論」である。

2 「哲学的断片後書」は「思弁哲学論」である。

3 両者はそれぞれ「詩人」性、あるいは「哲学」性を放棄し、止揚することを目指すものである。

従って、「審美的著作」が「詩人論」であることは、ないしは(少なくとも)この「詩人」概念がキェルケゴール理解のための最重要キーワードであるということは、疑う余地はないと思われる。従って、この概念の究明こそがキェルケゴール理解のための最優先課題であるはずである。このことはキェルケゴールの個々の著作のより詳細な読解によって十分に検証され得るであろうが、とりあえずいまここでは、『視点』そのものの中からキェルケゴール自身の言葉を幾つか引用しておこう。

「人がそこから去らねばならないものが「詩人」である、という思想は実際すでに「あれか—これか」において表現されている。とは言え、そのことが全著作活動の全体性の中で理解されるならば、「あれか—これか」の第二部が説明し得たよりもはるかに深い意味において人は「詩人」から去り、あるいは離れなければならない、ということが重要なのだが。「あれか—これか」において事情がそうであることは既に「非学問的後書」一八八ページ二一—行目以下に記されている、実際、「あれか—これか」においてなされているところの移行は周知のように確かに、ある種の詩人的実存 (en Diger-Existent) から、ある種の倫理的存在 (en ethisk Existent) への移行なのである。」<sup>(23)</sup>

『詩人』から宗教的に実存すること (religiøs Existent) へのこの運動は全体としては、根本的に全著作活動における運動である。キリスト教的宗教的に実存すること (christelig Religiøs Existent) への出発限界 (terminus a quo) としての『詩人』について再三なされている使用法に関しては、『愛の業』を参照してもらいたい。一連の著作の中に記されているところの、哲学的なもの、体系的なものから、

単純なもの、すなわち実存的なものへの運動に関して言うなら、この運動は、ある全く別の連関においてであるにすぎないにせよ、本質的には詩人から宗教的に実存することへの運動と同じものである。」<sup>(24)</sup>

キエルケゴール独自の「詩人」概念、及びこの概念が彼の著作活動全般において占める意義については、『視点』の中で述べられている限りにおいては、ほぼ以上の如くであると言える。さらに具体的かつ詳細な考察は実際に個々の著作を扱う際に譲るとして、ここでは(いわば予備的考察として)、以下の二点に言及しておきたいと思う。その一つは、この「詩人」概念と「キリスト教界」との関係についてであり、もう一つは、この概念がいわゆる「主体性」概念とどのように関わっているか、ということである。

α キエルケゴールが彼の著作活動において念頭に置いていた「詩人」とはいかなる詩人だったのか。特に注意すべきことは、「詩人」は「詩人」なりに思索を深め、神を求め、神を愛し、その限りで、

たとえ一種の熱狂者としてではあるにせよ、キリスト教的—宗教的なもの対して極めて深く関わることもありうる、ということである<sup>(25)</sup>。この場合、かの「詩人」の意識の内には、自分が宗教的であり、宗教的洞察を持っており、宗教的なものによって高められ、またそれによって芸術的（詩的）創作へのインスピレーションを得ている、という「主体的」確信が断固として存在する。そして、それによって彼は神を感じ、神への感謝の言葉を述べ、自らの信仰を作品として、すなわち詩として、ひたすら表現しようとする。……ところが、キエルケゴールによるなら、これこそがまさしく「頂点」にまで高められたところのかの「錯覚」そのものにほかならない。なぜなら、「詩人」は本来、たとえそれがどこまで「深化」しようが、感性的—審美的実存の一形態であることに変わりはないからである。

キエルケゴールによれば、「詩人」は感性的—審美的範疇に属する規定である。このことに異論をさしはさむ者はさしあたってはいないであろう。しかし、だからと言って、すべての「詩人」が、それによって直ちに極端な倫理的墮落であるというわけではないし、あるいはそれが享樂的な一種の心身喪失

じみたものである、ということでもない。確かにそうした「詩人」も現実には数多く存在するだろうし、キエルケゴールもまた、著作活動において「その種の」詩人を幾例か描いてはいる。しかし、彼が対象として主として取り扱っている詩人はこの種の詩人なのではない。むしろ、「宗教的なもの」への指向性を持ったところの、要するに「宗教詩人」とでも言うべきものを、彼は主たる対象としているのである。……もちろん、「詩人」がどれほど「宗教的」色彩を強めようが、彼が「詩人」である以上は本来の「キリスト教的宗教性」とは本質的に全く無縁である<sup>(26)</sup>。しかしキエルケゴールは、外見的には、あるいは中途半端な観察にとつては、この「詩人」的宗教性さえもしばしば、「キリスト教的」宗教性とほとんど区別がつかないほどにまで完璧に洗練される、ということもありうる、と考えるのである。ここに、「詩人—宗教性」と「キリスト教—宗教性」との混同が生じ、そこに途方もない混乱、すなわち「キリスト教界」という「錯覚」が、しかも最高度にまで洗練され、「高められた」形態において、現出することになる。

要するに（少々図式化し単純化して言うなら）、

われわれ自身の「宗教的なもの」への精神的傾倒そのものの内に、実は「感性的―審美的なもの」への萌芽が既に含まれているということ、あるいは逆に、「感性的―審美的なもの」への傾倒がかなりの高い蓋然性をもって「宗教的」色彩を帯びるようになるということ、こそが問題なのである。従って、宗教的なものへ向かつてのわれわれの情熱と精神の深まりは、極めてしばしば単なる感性的―審美的な深まりにすぎない、といったことも十分起こり得る（それがそれぞれの個人の内面においてはどれほど真摯なものであったとしても、である）。言い換えるなら、宗教的な情熱は常に「審美化」の危険にさらされているのである。ここにキェルケゴールが言う「詩人」が出現する（従って、言うまでもないことだがこの概念は単にいわゆる「作家」や「著作家」を意味するのではない）。さらに問題なのは、こうしたことを「宗教的」な、あるいは「宗教性を帯びた」人々が多くの場合まったく気にも留めない、ということである……これらの、ある意味で極めて「皮肉」な諸事態をキェルケゴールは彼の著作活動を通じて徹底的に考え抜いたと言ってよい。そして、そうすることを通じて、そういうものでは

「ない」ものを、逆説的に浮かび上がらせようとしたのである。

われわれは、一度はとにかく自分の中にある「詩人」性を徹底的に洗い出し、それを完全に使い尽くし（*udtomme*）、そこから離れ去るのでなければならぬ（このことが具体的に何を意味するか、ということについてはいまここで詳述することはできないが）。そうせずに、「詩人」的なものをいわば引きずったままで、「宗教的なもの」について語ろうとすれば、結局はわれわれは「キリスト教界」という錯覚（あるいはその類比物）を「反復」するすぎない、そのような仕方ではわれわれは絶対に真の「宗教性」に出会うことはない……キェルケゴールが彼の著作活動、とりわけ偽名のそれを通じて言わんとしているのはこういうことなのである。

β キェルケゴールにおける「主体性の逆説」について

「詩人」は「情熱（*Lidenskab=Leidenschaft*）」を内に秘めた存在である<sup>(27)</sup>。キェルケゴールによれば、主体性の極致は情熱である。その意味で、「詩人」

はれつきとした主体性の規定なのだと言うことができる。つまり「詩人」は紛れもなく一人の「主体的実存者」なのである。

さきに、「詩人」にはさまざまなタイプがあることについて述べた。しかし、どのような「詩人」であれ、すなわちデモニーシユなタイプの「詩人」であれ、あるいは宗教的なものへの方向性を持った「詩人」であれ、あるいはまた、単なる「憂鬱」の使者としてのそれであれ、いずれにしても、彼の内面には飽くことなき「情熱」が秘められている。その限りで「詩人」は明らかに「主体性」の範疇に属すると言うことができる。つまり、キエルケゴールが言うところの「詩人」とは、われわれの主体性そのものが極限まで発展せられ、洗練せられたものを表す規定にほかならない、と言ってよいのである。

そこで、少々「皮肉」な言い回しではあるが、次のように言い得るであろう。すなわち、

われわれがわれわれ自身の「主体」としての自覚を深めれば深めるほど、それだけですすまわれわれは『詩人』になる」……と。

言うまでもなくキエルケゴールはわれわれの「主体性」というものを極めて重視したのであった。な

ぜなら、彼においてはわれわれ自身が「主体的」にキリスト教と関わり、ことだけが唯一「キリスト者となる (Olive Christen) 道だからなのであった。そこで、「主体の覚醒」、あるいは「自我の覚醒」といったことが課題となる。われわれはいわゆる「直接性」の領域を離れ、「実存的主体」たらねばならぬ。

さてそれでは、実際にわれわれの「主体」が覚醒した際に、われわれはどうなるのか? ……: その時われわれは例外なく「詩人」になる、そうキエルケゴールは言うのである。その「覚醒者」が宗教的なものへの方向性を持つていようが、あるいは逆にデモニーシユなものへの方向性を持つていようが、例外なくそうなるのである。そして、とりわけ前者の場合、その「覚醒者」は「宗教的なもの」と「感性的—審美的なもの」との奇妙で奇怪な融合物を作り上げることになる。つまり、

「一般にわれわれがより深く主体的であればあるほど、せいぜいのところわれわれはそれだけですすま『詩人』としての自己を深めるに過ぎないのであって、その場合、われわれは宗教的なものそのものへと向かって進んで行くのでは決してない。」

……と言えるのである。

われわれはわれわれ自身の「実存的主体性」に対してすら、一度は徹底的に懐疑の目を向ける必要がある。われわれは、われわれ自身が「主体」だと思つていたものが実はいかに疑わしいものであるかということ、あるいは、われわれが普通の意味で実存的主体と見なしているものが、少なくとも「実存的—宗教的」主体性ではないということ、身をもって洞察し自覚しなければならぬ。そのためにはわれわれは、われわれ自身の主体性そのものをすら一度は言わば目的論的に停止しなければならぬ。そうせずには真の意味での「宗教的なもの」は決してわれわれの前に現われることはない、そうキエルケゴールは考えたのである。

キエルケゴールの全著作活動を「詩人論」として捉えるのが正当であることは以上見た通りである。

ここで彼が行ったような問題提起は「現代」においては何もや何の意義も影響力もないように思われるかもしれない。確かに、われわれが「宗教的なもの」

の「をもはや意識しないというのなら、全くその通りと言えるだろう。が、私としてはむしろ、「審美的なもの」あるいは「詩人的なもの」の領域は、キエルケゴール自身が思い描いていたよりもはるかに広大かつ深遠になり、しかもそれが（形態は変わっているにせよ）「宗教的」色彩を帯びる度合いもますます大きくなっているようにさえ思うのである。……こうした疑問に対しては正確に答えるのは困難である。私としてはとりあえず文献学的な正確さを追究するだけで手一杯である。

また、より具体的に *Diger* とは何か、いかにして *Diger* から脱するのか、あるいは「*Diger* 的なもの」と「非—*Diger* 的なもの」を厳密に区別するものは何か、といったことについては今後の課題とさせていただきます。

### 註

キエルケゴールの著作からの引用はデンマーク語原典全集 (Soren Kierkegaard Samlede Værker) 第三版に拠る。邦語訳 (東方出版、大谷 長氏訳) にはそのページ数が示されているので、気になる方はそ

ちのを参照していただきたい。

- (1) SV18, S.81
- (2) SV18, S.82
- (3) SV10, S.284f
- (4) SV18, S.88f
- (5) SV18, S.93f
- (6) SV18, S.95
- (7) SV18, S.105
- (8) SV18, S.99
- (9) SV18, S.134
- (10) SV18, S.89
- (11) SV18, S.99
- (12) SV18, S.99
- (13) SV18, S.99
- (14) SV18, S.100
- (15) SV18, S.102
- (16) ここに後のいわゆる「教会闘争」の萌芽を見てとることができるだろう。キエルケゴールの教会批判については、そもそも私はそういうことを扱える立場にはないのでこれ以上言及しない。
- (17) SV18, S.122

(18) SV18, S.120f

(19) この「見かけの類似」こそが実際キエルケゴールの著作活動、とりわけ偽名のそれ、の主たるテーマであると言ってよいのである。

(20) SV18, S.122

(21) SV18, S.125

(22) SV18, S.126

(23) SV18, S.125

(24) SV18, S.164

(25) この点に関しては先程の註(18)の引用箇所を参照。

(26) こここそがキエルケゴールの全宗教思想の核心でもある。

(27) 先程の註(18)の引用箇所を参照。

(さいとう あきひろ 慶応大学)